

高田崇史

Takada Takafumi

QED

quod erat
demonstrandum

証明終わり



伊勢の 曙日光

時に天照大神、

倭姫命に誨へて曰はく、

「是の神風の伊勢国は、

常世の浪の重浪帰する国なり。

倭国の可憐し国なり。

是の国に居らむと欲ふ」

とのたまふ。

社文庫
談講
文庫



講談社文庫

Q E D

伊勢の曙光

高田崇史

講談社

著者 | 高田崇史 昭和33年東京都生まれ。明治薬科大学卒業。『QED
百人一首の呪』で、第9回メフィスト賞を受賞しデビュー。

キューイーディー いせ あけぼの
QED 伊勢の曙光

たかだ たかふみ
高田崇史

© Takafumi Takada 2014

2014年1月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——株式会社精興社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277723-0

目次

瑠璃	幣の朧夜	龍の御生	血の織枝	徳の魔物	碧の至宝	法の侏儒	丹の靈璽	花の仕舞	論の烽火	伊勢
るり	ぬさのおぼろよ	りゆうのみあれ	ちのおりえだ	とくまもの	へきしほう	ほうしゅじゅ	にれいじ	はなしまい	ろんほうか	いせ

解説／千街晶之

550	537	459	370	310	257	212	157	98	45	11	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	---



講談社文庫

Q E D

伊勢の曙光

高田崇史

講談社

神風かむかぜの伊勢いせの国は

国見ればしも山見れば高く貴とうとし

川見ればさやけく清し

水門みなとなす海も広し

見渡しの島も名高し

此こゝをしもまぐはしみかも

掛けかまくもあやに恐かしこし

目次

瑠璃	幣の朧夜	龍の御生	血の織枝	徳の魔物	碧の至宝	法の侏儒	丹の靈璽	花の仕舞	論の烽火	伊勢
るり	ぬさのおぼろよ	りゆうのみあれ	ちのおりえだ	とくまもの	へきしほう	ほうしゅじゅ	にれいじ	はなしまい	ろんほうか	いせ

解説／千街晶之

550	537	459	370	310	257	212	157	98	45	11	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	---

《伊勢》

貴方あなたの遠い面影を追い求め、私は一人、春まだ浅い山道を歩く。

ほの暗い小径こみちには人影もなく、ただ冷ややかな空気だけが堅く張りつめている。見上げれば、空は厚い雲に覆おおわれ、冷たい夕東風ゆうごちが、私の胸の奥まで突き刺さっては、素知らぬ顔で通り過ぎて行く。

その情け知らずの風に木々が震える度たび、まだ散らずとも良い若い緑葉たちさえも、音を立てて舞い落ちる。

何と風の強い日だろう。

道に堆うずたかく積もった緑葉たちは突然の旋風つむじかぜに怯おびえ、すぐるかのように私の足に絡からみついてくる。

その中を静かに歩いて行く私は、まるで緑の川の流れを遡さかのぼる舟人ふなびとのようだ。いずこへともなく流れる川を、ただ自分の影だけを静かに曳航えいこうして……。

人が死に、その魂たましいが天へと飛翔する時——魂が風となるのか、それとも風が魂を

巻き上げるのか——地上には突風が巻き起こるという。

遙か遠い昔、人は天空を駆ける一個の風だった。それ故に、命の灯火が消える時には、魂魄の魄——肉体を地上に残して、魂だけが天へと翔け昇って行くのだ。風は魂の叫びだ。

そして今。

こうして私を掬め捕ろうとしている突然の旋風は、貴方の魂の叫びなのか。ほんの数時間前、私の目の前で黄泉路へと旅立って行った貴方の。

私はふと、血塗られた右手に目を落とす。

貴方の美しいその血がきらめいた小刀を、震えながら握っていた私の右手を。

私は小刀で、貴方の親指を落とした。あんな小さな刀で落とせるとは思わなかったが、とても綺麗に落ちた。

しかし、まさかそれほど強く私の手を握り締められるとは思ってもしなかった。私はてつきり、貴方一人で静かに黄泉の国へ旅立ってくれるものとはばかり思っていた。だから私は、貴方の手に切りつけたのだ。

そしてその後、改めて貴方の親指を切り落とした。

もちろん、左右両方とも。

自分の親指が落ちる様に驚きの余り声も立てられず、ただ呆然と目を見開いて私を

見つめていた貴方も、体ごと深い闇に呑み込まれるように、音も立てずに落ちて行つた。おそらく体は激しく打ちつけられたのだろう。だが幸い優しい闇が、その場面を私の視界から外してくれていた。

貴方は私と一緒に連れて行こうと思つたのか。

それとも、ただ恐怖の余り私をつかんだのか。

今となつては分からない。

どちらにしたところで、ただ一人その答えを知つていた貴方は、もうこの世にはいない。

それにしても――。

神は、どうしてこうも人の命を、血を欲するのだろうか。

実のところ、神は人を愛してはいないのか。

それとも、人が神を愛し足りていないのか。

いや、そもそもお互いに理解し得ぬのに、愛し合えると憧憬すること自体が間違いなのか？

だが、私たちは、もう二千年の時を越えて神を崇拜し、崇め奉り、そして祈り続

けてきた。もちろん私もそうだ。心から八百万の神々を、そして個々の神たちを愛し敬慕してきた。

それが、ごく一般の人々の思いではないのか。
そしてここ伊勢^{いせ}は、その最たる場所だ。

「神風^{かむかぜ}の伊勢国^{いせこく}は、常世^{とこよ}の浪^{なみ}の重浪^{しきなみよ}帰^{かへ}する国^{くに}」

あまてらすおおみかみ とようけのおおかみ
天照大神^{あまてらす}、豊受大神^{とようけ}を始めとして、太古からの神々が鎮座^{ちんざ}坐^{まし}す国。この地を除^{のぞ}いては存在^{てんじ}し得^えないであろう天壤無窮^{てんじようむきゆう}の神域。神聖で、廉潔^{れんけつ}で、悠久で、そして浄闇^{じようあん}の国——伊勢。

そこに暮らしていた貴方の魂は、今夜こうして力強い風に乗り、天へと翔け昇ったのだ。

肉体を暗闇の中に捨てた、その代償として貴方は今、神となる。

何と美しく素晴らしい出来事。

もちろん私は貴方を決して忘れない。

そして貴方も、必ずここに戻って来る。貴方のことを誰よりも愛し、今もまだ心の底から尊敬し続けている、この私のもとへ。

《論の烽火》
ろん ほう か

春と聞いて「桜」をイメージするようになったのは、つい最近の出来事だという。ほんの少し昔までは、春といえば「梅」だった。四月の初めというよりは、二月の終わり——それが、本当の春。

棚旗たなはたな々々も、そんな春が好きだった。

肌を刺す冷たい風が吹き、未だ花の蕾つぼみも固く、雪さえちらつく浅い春。弱々しい日差しの中でどこからか、ふわりと香る梅の花。長い長い冬の終わりを告げるように、ほんの小指の先ほどピンクに色づき始めた桜の蕾。油断して目を離そうものならば、あつさりと視界から消え去ってしまいそうな幼い春たち。

花をのみ待つらむ人に山里の
雪間の草の春を見せばや

と詠んだのは、藤原^{ふじわらの}家隆^{いえたか}だが、そんな気負いも思い入れもなく、ただ素直に好きだった。

ひよつとすると奈々は、春そのものよりも、春が来ると言う「予感」が好きなのかも知れない。大掛かりな結婚披露宴の会食のように際限なく展開されてゆく春より、まだ挙式前の張りつめた予感が。

そんな三月の初め。

現実^{じやうじつ}に立ち返れば、梅の香^かを感じる余裕などなく、奈々はホワイト薬局で処方箋^{しよほうせん}を片付けていた。

午前の患者さんたちの大きな波も、ホッと一段落して、今日はこのまま昼休みへと入るだろう。しかしこの季節は、風邪やインフルエンザの患者さんも多いから、午後も気を抜けない。昼休みは少しのんびりして、後半の英気を養っておかなくては。

そんなことを思っていると、

「フアーックション、ウン」

やや調子外れのテノールで、外嶋^{そとしま}一郎^{いちろう}が大きなくしやみをした。

外嶋は、ここホワイト薬局の薬局長。四十七歳独身。趣味は、オペラ鑑賞その他クラシック全般、そして山の散策。ちなみに、冬山で遺体を発見したことあり。

奈々の母校、明邦大学めいほうの大先輩で、奈々がこの薬局に勤め始めてもうすぐ九年、ずつと一緒に働いている。ある面ではとても信頼に足るベテラン店長であり、また違う面では子供よりも子供っぽい。少し薄くなりつつある髪と、秀ひいでた額ひたい。モアイ像のように大きな鼻に乗った黒縁眼鏡くろぶちの、実に良く似合う男性だった。

「ありやりや」

それを聞いて、薬局アシスタントの相原美緒あいはらみおが、パソコン上でデータを整理しながら、大袈裟おおげさに外嶋のぞを覗き込んだ。

「もう花粉症ですか？　いくら流行の先取りをしたいからって、まだちよつと早いでしょう」

美緒は二十六歳。外嶋とは遠い親戚になるという、独身女性だ。双方のお祖父さんじい同士が兄弟だと聞いた。しかしその時外嶋は、「殆ど他人ほとんと同じだな。二の六乗分の一程度のDNAつな繋がりだから」などと真顔で言っていた。

「またきみは」外嶋は眉間みけんに縦皺たてじわを二本寄せて、美緒を睨にらむ。「そうやって、人の病に対する愛情のない言葉を発するんだな。どうやらその不幸な癖くせは、全く直っていないらしい」

「そんなことないです。私はいつも愛情一杯ですわ」

「何が『ですわ』だ」